

W. フォークナーにおける宗教的意識

瀬 尾 修

1 はじめに

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) における宗教性について考察する場合に留意しなければならないことは、彼の作品における神の存在意識にその宗教性を観るのではなく、人間が自らの存在の根底にもっている神への根強い願望に観なければならないということであろう。換言すれば、Doreen Fowler が指摘するように¹、フォークナーにおける宗教的意味を解くかぎは、彼の作品がその焦点を神の存在そのものというよりも、むしろ“神的なもの (the divine)” へ向かう人間の願望に置いているという点にある。

フォークナー批評家の中には、フォークナーを明白にキリスト教作家と位置付ける者もいる。例えば、Randall Stewart はその一人であるが、彼は *American Literature and Christian Doctrine* において、「フォークナーは基本的キリスト教概念を極めて効果的に具体化し、劇的に表現しているので、当代のもっとも深いキリスト教作家の一人 (one of the most profoundly Christian writers in our time) と正当にみなすことができる。」²と述べている。Cleanth Brooks は *The Hidden God* 中のフォークナーに関する章において、Stewart の見解に基本的に賛同しながらも、フォークナーを「当代におけるもっとも深いキリスト教作家の一人」とするのは軽率だと断じた上で、おそらくより安全な呼び方は「深く宗教的作家 (a profoundly religious writer)」であると主張する。Brooks は更に敷衍し

て、登場人物がキリスト教的環境の出であり、彼らのもつ欠点や彼らが犯す神学的誤謬がどのようなものであるにせよ、キリスト教的関心事を象徴しており、最終的にはこれらの登場人物はキリスト教的前提を参照して初めて理解されるとも主張している。³

本論の全般的な目的は、作家フォークナーがその創作活動において宗教、キリスト教を意識していたのか、していたとすればどのような意識をもっていたのかを探ることにある。具体的には目的をさらに特定して、フォークナー自身の宗教に関連した直接的な発言に基づいて、彼の宗教に関する意識を探ることにしたい。

2 フォークナーの宗教的背景

フォークナーは1957年4月、バージニア大学における質疑応答において、*A Fable* に用いられている十字架のイメージについての質問に対して、作家は自分の背景を基にして創作せざるを得ないこと、また自分自身の背景は、ミシシッピの小さな町で過ごした少年時代に植え付けられたキリスト教説話であることを次のように述べている。

Remember, the writer must write out of his background.
He must write out of what he knows and the Christian legend is part of any Christian's background, especially the background of a country boy, a Southern country boy. My life was passed, my childhood, in a very small Mississippi town, and that was a part of my background. I grew up with that. I assimilated that, took that in without even knowing it. It's just there. It has nothing to do with how much of it I might believe or disbelieve — it's just there.⁴

ウィリアム・フォークナーの母親 Maud Butler は結婚する前はバプテストであったが、結婚してフォークナー家の一員となってからはメソヂスト教会に所属した。⁵ ウィリアム・フォークナーの弟の Murry Charles によると彼の兄弟たちはメソヂスト教会で洗礼を受け、規則正しく日曜学校にも通っていた。⁶ そういうわけでウィリアム・フォークナーは少年期にメソヂスト教会において身に付けた南部プロテスタンティズムこそが自分の宗教的背景の一部だと確信していたと考えられる。そしてこのように少年期に知らず知らずのうちに自己に同化された宗教的背景は、フォークナーがその内容を信じているかいないかという次元を超えて、作家としてのフォークナーの作品に表出されるのはいわば避けられない、必然のことであるとフォークナーは説明しているのである。

3 フォークナーと旧約聖書

フォークナーが旧約聖書を愛読書の一つとしていたことはよく知られた事実である。その背景には聖書を大切にするというフォークナー家の家風があったと考えられる。フォークナー家には代々伝わる系図付の聖書があり、長男が相続することになっていた。そういうわけで、「ウィリアム・フォークナーは彼の父が1932年8月7日に死去した時、革装、挿絵入りの聖書を相続した。」⁷ また、ウィリアム・フォークナーの幼年期の追憶に大きな影を落とした人物に曾祖父 Murry (祖母 Sallie McAlpine Murry の父) がいる。ウィリアム・フォークナーによると、子供達から見ると、彼は特に敬虔、または厳格な人物というわけではなかったが、信念は曲げない人物であった。「その信念のひとつが、(朝食の席に着く時は) こども、大人を問わず全員が聖書からの一節を用意して、すらすらと言わなければならない」⁸ というものであった。もし聖書の一節の用意ができていなければ、朝食にありつけないことになっていた。幼い時からのこのような環境もウィリアム・フォークナーの聖書の素養の基礎になったに違いない。

1957年3月および5月のバージニア大学での質疑応答において、愛読書のタイトルを示すように求められたフォークナーは、『ドン・キホーテ』、『ボヴァリー夫人』、『カラマーゾフの兄弟』、『アンナ・カレーニナ』、『闇の奥』、『白鯨』などの世界の古典的文学作品と並べて旧約聖書を挙げている。⁹ さらに、同じ5月の質疑応答では、旧約聖書への言及に比べて新約聖書へのそれが少ないことを訝る発言者に対して、新約聖書は「観念に満ちている」のに対して、旧約聖書は「人間に満ちている」から好んで読むのだと答えている。

To me the New Testament is full of ideas and I don't know much about ideas. The Old Testament is full of people, perfectly ordinary normal heroes and blackguards just like everybody else nowadays, and I like to read the Old Testament because it's full of people, not ideas.¹⁰

1958年4月の質疑応答においては、旧約聖書の中で最も好きな人物を尋ねられたフォークナーは、「アブラハムの物語」を挙げ、その理由は悪党やごろつきが登場して現代人がしているのと同じように全力を尽くして（悪事に）励んでいるからだと答えている。¹¹

しかし、新約聖書の中でも教義神学的、象徴的色彩が濃厚なヨハネ福音書を別にすれば、イエス・キリストの伝記としての福音書には、悪人、罪人、偽善者、裏切り者等も数多く登場している。したがって、ここでフォークナーが新約聖書は「観念に満ちている」と切り捨てているのは、フォークナーの確固たる考えに基づく発言というよりも（実際、後述するように彼は「キリストの物語」の重要性を認識しており）、むしろ旧約聖書への愛着を強調するための表現と考えるべきであろう。つまり、旧約聖書に関するこれら一連の発言は、作家としてのフォークナーが、例えば太祖アブラハムの物語に代表される何世代にも亘ってさまざまな人物が入り乱れて

登場するスケールの大きな物語に興味をもったということを示すものであり、さらに、彼が創作においてなによりも先ず人物を描くことに力点を置いていたという事実を裏付けるものであると理解すべきである。

4 フォークナーと神の存在

1952年フランス人 Loïc Bouvard とのインタビュー¹²は、フォークナーが神への信仰についての考えを明白に表明している数少ない機会の一つである。このインタビューにおいて、質問者 Bouvard の「大勢の若者が神への信仰を人への信仰に取り替えようとしています」¹³という発言に対して、フォークナーは「おそらくそういう仕方で神を蔑ろにするのは間違いです。神は存在します。人間を創造したのは神です。もし神を認めないなら、何も出来ないことになるでしょう」と答えている。この発言は創造主としての神の存在をフォークナーが信じており、また神の存在を信じるのが人間にとっては意義があるとするフォークナーの表明であるといえよう。

この後、フォークナーはことばを続けて、「当然のことですが、(中略)私は人格化された神、または機械的な神 (a personified or a mechanical God) について話しているのではありません。私は人類のもっとも完全な表現である神、永遠と現在の両方に安んじている神 (a God who is the most complete expression of mankind, a God who rests both in the eternity and in the now) のことを話しているのです」と述べている。人格神の否定、もしくは汎神論の肯定とも受け取れる発言の中に、Henri Bergson の影響を感じ取った質問者 Bouvard は、フォークナーが「Bergson の神」のことを考えているのかと尋ね、フォークナーの口から「そうです」という答えを引き出している。¹⁴ しかし、フォークナーの神概念がキリスト教における神概念と本質的に異なるか否かの議論はおくことにして、¹⁵ここでは文学作家にとっての神概念の重要性についてのフォークナー

の興味ある見解を見ることにする。

1957年5月6日、フォークナーはバージニア大学での質疑応答において、Hemingwayと比較して創作態度について質問されている。この質問に対してフォークナーは、「私が思うには、作家という者は神よりも上手く人物を創造できると思い込んでおり、(中略)重要なのは、作家が紙の上に書き付けて一後ろ脚で立たせ、影を落とさせようとして一いる人物だということを確認しています」と答えている。¹⁶ このことばには、作家の人物創作が神の創造の業に匹敵するものであるとするフォークナーの考えを読み取ることができる。

翌5月7日、作家としてのHemingwayについての意見を尋ねられたフォークナーは次のように答えている。

彼の最後の作品、『老人と海』が最良の作品だと思います。なぜなら彼はそれまで発見しなかったもの、つまり神を発見したからです。その時まで、彼が描く人物は真空の中で、過去ももたずに動いていました。ところが突然『老人と海』で彼は神を見出したのです。

His last book, I think, *The Old Man and the Sea*, was the best because he discovered something which he had never found before, which was God. Up to that time his people functioned in a vacuum, they had no past, but suddenly in *The Old Man and the Sea*, he found God.¹⁷

フォークナーはこの引用に続く数行において、「神は～を造り給うた」(“God made...”)という創世記における天地創造を描写する表現を使用して、Hemingwayが『老人と海』で創作した大魚、老人、鮫に言及し、さらに「もし彼の作品がそれから続行するなら、さらに優れたものになる。

だろう (if his work goes on from then it will still be better)」と付け加えている。この「それから」という表現は、Hemingwayが『老人と海』において、神を「発見」し、天地創造に参画するかのよう生き物も含めた登場人物を造り出した時点からを指すと考えられる。

ここでフォークナーは、Hemingwayを引き合いに出してではあるものの、神を発見することが作品の価値を高めるものであることを公言しているといえよう。

さらに、同年5月7日の質疑応答¹⁸に於いては、戦後ヨーロッパの作家のレベルについて、「神を見出さずに成功した作家はこれまでにいましたか」という質問が出された。これに対してフォークナーは「私はいたとは思いません。神について、あるいはどんな名前でも呼ぼうとも勝手ですが、その存在についてのなんらかの概念なしに、創作が成功することはないと思います」と答えている。フォークナーはその後、神を否定した Jean-Paul Sartre について、Camus、Proust、および Stendhal との相違を指摘し、さらに Hemingway について前日5月6日の繰り返しともいえるほど内容の発言をしている。この発言も、「神についての概念」が作品の成否を左右するというフォークナーの考えの表明ととることができる。

このように見てくると、作家としてのフォークナーは創作活動における神信仰の必要性を十分認識していたと言わざるを得ない。

5 フォークナー作品におけるキリスト教的象徴

André Bleikasten の指摘¹⁹を待つまでもなく、フォークナーの作品はキリスト教的伝統に負うところが大きいことに疑いの余地はない。しかし、フォークナー自身は自らの作品においてキリスト教を本質的な構成要素として使用していることを認めるのを極力避けようとしているかのようである。

1957年5月6日、バージニア大学における質疑応答において、『八月の

光』のジョウ・クリスマスの中に「なんらかのキリストの象徴 (any Christ symbol) を意図していたか」という趣旨の質問に対して、フォークナーはそのような意図を否定している。そして、「それは作家が自分が言おうとしていることをもっとも効果的に話す何かを見付けるために、物置小屋の中を探すようなものです。」と続けている。フォークナーによれば、キリスト物語は人間が発明した物語の中でも最良のものの一つであり、キリストとその受難の物語をキリスト教的背景として有する作家であれば、恣意的に繰り返そうという意図はなくても、そうしてしまうものだと言っている。フォークナーは「私にとっては第一に人物、次に象徴が来るのです」と結んで、キリスト教的象徴を用いるのはあくまでも人物を描き上げるための手段である点を強調している。²⁰

また、1958年3月13日のバージニア大学における質疑応答においては、『響きと怒り』の日付にどのような象徴的意味を与えたかという質問に対し、大工道具を比喻にして答えている。

もっといい鶏小屋を作る道具を見付けるために大工道具店を探し回るといことがあります。おそらく、というよりも、私は確信しているのですが、私が復活祭を選んだのは本能的なことで、私は受難週間の象徴を全く書こうとはしていませんでした。受難週間や復活祭というのは私が鶏小屋の中に作ろうとしていた特別の角に便利な道具だったので、それを使ったのです。

Now, there is a matter of hunting around in the carpenter's shop to find a tool that will make a better chicken-house. And probably - I'm sure it was quite instinctive that I picked out Easter, that I wasn't writing any symbolism of the Passion Week at all. I just - that was a tool that was good for the particular corner I was going to turn in my chicken-house and

so I used it.²¹

フォークナーのこのような発言は、『響きと怒り』や『八月の光』においてはキリスト教的象徴が作品の中心的関心事であるとする解釈を明確に否定するものであり、また同時に彼が人間を描き出すことをいかに重要視していたかを示すものでもある。

6 結び

以上、フォークナーが自らの創作活動において、宗教、具体的にはキリスト教についてどのような意識をもっていたのかという問題を、フォークナーの宗教的背景、旧約聖書に対する愛着心、および神の存在への信仰の重要性の認識、さらにフォークナーが作品中にキリスト教的象徴を用いた理由、などの観点からフォークナーの発言を中心に考察してきた。考察した結果、作家としてのフォークナーは、一人の人間として、また偉大な創造的作家の一人として、宗教を十分に意識していたと結論することができる。

しかし、フォークナーの宗教的意識が彼の作家としての評価にどのように関わっているかについて、結論を導き出すのは極めて困難であることを認めざるを得ない。本論冒頭において紹介した Randall Stewart の、正にその宗教的ビジョンの故にフォークナーを「最も深くキリスト教的作家のひとり」だとする見解は、フォークナーにおける宗教的意識の意義を積極的に肯定するものである。他方、フォークナーの宗教的ビジョンは重要なものであるが、そのビジョンだけがフォークナーを偉大な作家たらしめているのではないという Evans Harrington の見解²²はその意義を全面的に否定するものと言うことができる。勿論、これらの見解のどちらが全体的に正しいかを判定することは非常に困難というより、むしろ不可能であり、本論の意図するところでもない。

この問題は突き詰めて考えると、フォークナーの作品においてキリスト教は単に創作する上での「道具」に過ぎないのか、あるいはそれ以上の役割を果たしているのか、ということになる。そしてこの問題を解決するためには、フォークナーの個々の作品について改めて検証する以外に道はないのであろう。

Notes

- 1 Doreen Fowler and Ann J. Abadie, eds., *Faulkner and Religion : Faulkner and Yoknapatawpha, 1989* (Jackson : University Press of Mississippi, 1991) ix.
- 2 Randall Stewart, *American Literature and Christian Doctrine* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1958) 141-42.
- 3 Cleanth Brooks, *The Hidden God : Studies in Hemingway, Faulkner, Yeats, Eliot, and Warren* (New Haven and London : Yale University Press, 1963) 347.
- 4 Frederick L. Gwynn, and Joseph Blotner, eds., *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1977) 86 (以下 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* と略す).
- 5 Stanley Lawrence Elkin. *Religious Themes and Symbolism in the Novels of William Faulkner* : Ph. D. Dissertation, The University of Illinois, 1961, 5.
- 6 Murry C. Falkner. *The Falkners of Mississippi* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1967) 23, 25.
- 7 Joseph Blotner. *Faulkner : A Biography* (London : Chatto & Windus, 1974) 6 (以下 Blotner, *Faulkner* と略す).
- 8 Blotner, *Faulkner* 123-24.
- 9 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 50, 150.
- 10 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 167.
- 11 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 285-86.
- 12 James B. Meriwether, and Michael Millgate, eds., *Lion in the Garden : Interviews with William Faulkner, 1926-1962* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1980) 68-73 (以下 Meriwether and Millgate, eds., *Lion in the Garden*).

と略す).

- 13 Meriwether and Millgate, eds., *Lion in the Garden*. 70.
- 14 Meriwether and Millgate, eds., *Lion in the Garden*. 70.
- 15 フォークナーにおける神の概念への Henri Bergson の影響については、次の箇所に議論がある。Mick Gidley, “The Later Faulkner, Bergson, and God”, *The Mississippi Quarterly* 37 (Summer 1984) 377-383.
- 16 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 118.
- 17 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 149.
- 18 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 160-61.
- 19 André Bleikasten, *The Most Splendid Failure : Faulkner's “The Sound and the Fury.”* (Bloomington : Indiana University Press, 1976) 202.
- 20 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 117.
- 21 Gwynn and Blotner, eds., *Faulkner in the University* 68.
- 22 Evans Harrington, “A Passion Week of the Heart : Religion and Faulkner's Art” in *Faulkner and Religion : Faulkner and Yoknapatawpha,, 1989*, ed. Doreen Fowler and Ann J. Abadie (Jackson : University Press of Mississippi, 1991) 167.